

<特集「受動表現」>

ジンポー語の受動表現資料 Materials on Passive expressions in Jinghpaw

倉部 慶太
Keita Kurabe

東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所
Research Institute for Languages and Cultures of Asia and Africa, Tokyo University of Foreign Studies

要旨：本稿では、風間・川村・成田（2009）の調査票に基づき、ジンポー語（シナ・チベット語族）の受動表現の資料を提示する。ジンポー語には、受動的な項の再配置を伴う「受動文」と呼ぶうる構文が存在する。ただし、この構文は、項の再配置を必ずしも伴わず、動作主の背景化といった通言語的な受動文に見られる機能を持たない点で、通言語的に典型的な受動文とは異なる。調査票に掲載された日本語の調査項目の多くが、ジンポー語では受動文として表現できないという事実も、ジンポー語の受動文が日本語の受動文と大きく異なることを示唆している。

Abstract: This paper provides materials on passive expressions in Jinghpaw, a Sino-Tibetan language, based on the questionnaire developed by Kazama, Kawamura, and Narita (2009). Jinghpaw has a construction that can be referred to as a passive, which involves the rearrangement of arguments in a passive-like manner. However, this construction does not necessarily involve argument rearrangement, nor does it perform functions typically associated with cross-linguistic passives, such as agent demotion. Many Japanese passive sentences in the questionnaire cannot be rendered as passive sentences in Jinghpaw, underscoring substantial differences between passive constructions in Japanese and Jinghpaw.

DOI: <https://doi.org/10.15026/0002001044>

キーワード：ジンポー語, シナ・チベット語族, ビルマ, 受動, ボイス

Keywords: Jinghpaw, Sino-Tibetan, Burma, passive, voice

1. はじめに

ジンポー語 (ISO 639-3: kac) は、北ビルマ（ミャンマー）を中心に分布するシナ・チベット語族 (Sino-Tibetan) チベット・ビルマ語派 (Tibeto-Burman) の言語のひとつである。この語派のなかでは、とくにルイ語群との親縁性が指摘されている (Kurabe to appear)。ジンポー語は、言語的に多様なカチン人 (Kachin) の共通語のひとつとして通用し、北ビルマの主要な言語のひとつとなっている (Kurabe 2021)。多くのチベット・ビルマ諸語と同様に、動詞末尾型の語順を持つ。また、現代のジンポー語は、節レベルおよび名詞句レベルの双方で従属部標示型言語に分類される。アラインメントは主格・対格型を示し、示差的目的語標示 (DOM) を持つ。S 項と A 項は基本的に格を伴わないのに対し、A 項との差異化が必要な場合に P 項が対格で標示される。さらに、ジンポー語は近隣の東南アジア大陸部諸語と同様に、動詞連続を多用するとともに、文法テンスを持たないアスペクト・ムード卓立型の言語である。名詞句は文脈から復元可能な場合、しばしば明示されない。結合価変換に関わる操作として、使役や適用構文が認められる (Kurabe 2016, 2017)。



本稿の著作権は著者が保持し、クリエイティブ・コモンズ 表示 4.0 国際ライセンス (CC-BY) 下に提供します。
<https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/deed.ja>

本稿では、『東京外国語大学語学研究所論集』14号付録の風間・川村・成田（2009）の調査票に基づき、ジンポー語の受動表現に関する資料を提供する。この翻訳型の調査票には、日本語受動表現の例文が用意されている。筆者は2024年11月にこの調査票を用いてエリシテーション調査を実施した。調査のコンサルタントは、北ビルマのカチン州ミッチーナ市（Myitkyina）出身のL氏である。L氏は1989年生まれ的女性話者であり、言語形成期を含む長期間を同市で過ごした。L氏はジンポー語とビルマ語のバイリンガルであるとともに、日本語の高度な運用能力も有している。

同調査票には英語やビルマ語の対訳も存在するが、本エリシテーション調査は日本語文を直接ジンポー語に翻訳する形で行った。これは、日本語の調査項目が受動文であっても、英語やビルマ語がそれに対応して受動表現を用いるとは限らないためである。また、ビルマの公用語であるビルマ語を媒介言語として使用した場合、得られたジンポー語文にその影響がより顕著に現れる可能性がある。この点も、日本語の調査項目を採用した理由のひとつである。

本稿の構成は以下のとおりである。まず、第2節ではジンポー語の受動表現を概観し、受動的な項の再配置や受動の機能について確認する。続いて、第3節では風間・川村・成田（2009）の調査票に基づき、調査項目をひとつずつ記述するとともに解説を与える。最後に、第4節で本稿の内容をまとめる。

2. ジンポー語の受動表現

能動文（1）に対応する受動表現として、ジンポー語には動詞 *khrúm* 「会う」を用いた（2）のような文が存在する。この文では、被動者の主語への再配置など、受動的なボイス交替が認められる。加えて、（2）では動作主を文中に明示することができない点においても、受動的な動作主の降格を認めうる。本稿では、この構文を「受動文」と呼ぶことにする。受動文を形成する *khrúm* 「会う」は、（3）のように否定辞を直接付加することができるなど、動詞としての性質を維持しており、この構文は動詞連続の一種と見なしうる。

- (1) *màno=gò màgam=phé? gəyèt=?ay.*

PSN=TOP PSN=ACC beat=DECL

「マノーはマガムを殴った」

- (2) *màgam=gò gəyèt khrúm=?ay.*

PSN=TOP beat meet=DECL

「マガムは（マノーに）殴られた」

- (3) *màgam=gò gəyèt ñ-khrúm=?ay.*

PSN=TOP beat NEG-meet=DECL

「マガムは（マノーに）殴られなかった」

この種の受動文は、通常、被害の意味を帯びる。たとえば、（4）の文は、単に見られた状況では使用されず、見られることによって強い被害を受けた場合にのみ成立する。文脈のない状況では、見られるだけでは強い被害が生じにくいいため、この状況では（5）のように表現するのがより自然であるとされる。

- (4) *màgam=gò yu khrúm=?ay.*

PSN=TOP see meet=DECL

「マガムは見られた」

- (5) mǎgam=gò yu gəji khrúm=?ay.
 PSN=TOP see be.small meet=DECL
 「マガムは見下された (lit. 小さく見られた)」

上述のとおり, 受動文には受動的な項構造の再配置が認められるが, 項の再配置は必ずしも必須ではない。同じ形式が, 受動的なボイス交替を伴わずに使用されることもある。たとえば, 次の受動文 (7) では, 対応する能動文 (6) からの項の再配置が見られない。

- (6) mǎcǎ ló?-ló? si=?ay.
 person many-RED die=DECL
 「人がたくさん死んだ」

- (7) mǎcǎ ló?-ló? si khrúm=?ay.
 person many-RED die meet=DECL
 「人がたくさん死んだ (直訳: 人がたくさん死ぬことに遭った)」 (Kurabe 2016: 308)

さらに, 通言語的に典型的な受動には, 動作主の背景化, 被動者の前景化, 節間での同一主語の維持といった機能がある (Foley & Van Valin 1984: 107–186; Shibatani 1985; Keenan & Dryer 2007)。しかし, ジンポー語の受動文は, これらの機能と必ずしも結び付かない。たとえば, ジンポー語では, 「日本では日本語が話される」のような動作主の背景化は, 受動文で表現することができない。この言語では, 動作主の背景化は受動文ではなく, (8) のような動作主の省略や (11) のような不定表現によって実現されるのが基本である。次の (8) の直訳は「ジンポーの土地ではジンポー語を話す」である。このような動作主の省略や不定表現の使用は, 受動態を持たない言語において, その代替手段として通言語的によく用いられるパターンとされる (Keenan and Dryer 2007: 329–330)。

- (8) jìnpò?-bú-gá=kó? jìnpò?-gà cǎga=mǎ=?ay.
 Jinghpaw-abode-land=LOC Jinghpaw-language speak=PL=DECL
 「ジンポーの土地ではジンポー語が話される」 (Kurabe 2016: 308)

また, 上述の (2) では一見すると動作主の降格が認められるように見えるが, 次の (9) のように動作主を明示できる受動文も存在する。(2) に動作主を明示した (10) の文が容認されないのは, 受動文自体の機能によるものではなく, 有生性階層 (人間 > 動物 > 無生物; Comrie 1981: 178) 上で同一レベルにある 2 つの項 (「マガム」と「マノー」) が, 同一節内で裸の形で共存することに起因すると考えられる。すなわち, 項の語順が自由であるジンポー語において, このような状況では, どちらの項が動作主 (または被動者) であるかに曖昧性が生じる。そのため, 動作主の実現が阻止されると考えられる。この制約は, 受動文のみならず, ジンポー語の能動文にも一般的に見られるものである (倉部 2012)。

- (9) cǐ=gò gù y gəwǎ khrúm=?ay.
 3sg=TOP dog bite meet=DECL
 「彼は犬にかまれた」

(10) *màgam=gò mǎno gəyèt khrúm=?ay.

PSN=TOP PSN beat meet=DECL

「マガムはマノーに殴られた」

被動者の前景化も、通言語的に典型的な受動の機能のひとつである。ジンポー語の受動文でも、被動者が主語として実現されるため、被動者が前景化されると言う。ただし、受動文の主語は基本的に人間に限定され、さらに受動文は被害の意味を帯びるため、その使用範囲は限定的である。ジンポー語における被動者の前景化は、受動文ではなく、(11) のような被動者の左方転位によって実現されるのが基本である。この文の直訳は「母は人々が殺してやった」である。前述のとおり、この例では、動作主が特定の個人または集団を指さない非人称的な「人々（誰か）」という形で背景化されている。

(11) ?ənú=gò mǎcǎ=ni sǎt=káw=ya=?ay.

mother=TOP person=PL kill=away=BEN=DECL

「母は人々によって殺された」(Kurabe 2016: 308)

節間での同一主語の維持など、軸 (pivot) の制約を持つ言語では、節間の項の調整に受動が用いられることが知られている。たとえば、英語では、非文頭の等位節の主語を省略するために先行文と主語を一致させる必要があり、その実現手段として受動文が用いられることがある (Foley & Van Valin 1984: 107–186; Dixon 1994: 157–160)。しかし、ジンポー語はこの制約を持たず、節間で同一主語を維持する必要がない。たとえ非文頭の等位節の主語が省略されていても、文脈から復元可能であれば、それが先行文の主語と同一である必要はない。次の (12) のような例は、ジンポー語の節間統語論において、受動文が節間の同一主語の維持に寄与しないことを示している。同様のパターンは、(13) のような、連続する節のなかで省略された主語が必ずしも同一指示でない例にも観察される。

(12) gǎdè n-ná=?ay, rím khrúm=nná sǎt=káw=?ay.

how.much NEG-spend=NMLZ catch meet=SEQ kill=away=DECL

「しばらくして、(彼は) 捕まえられて (彼らが彼を) 殺した」(Kurabe 2016: 309)

(13) ɲay gát sa=yǎŋ, ráy thèt=ná, gùmp hrò báy n-jó=?yǎŋ, ɲay n-gúy phyí=?ay rê.

1sg market go=when thing order=SEQ money again NEG-give=when 1sg NEG-dare ask=NMLZ COP

「私が市場に行ったとき、物を注文して、(彼らが) お釣りを与えないとき、私は (お釣りを) 要求する勇気がないのだ」(Kurabe 2016: 309)

このように、ジンポー語の受動文は、通言語的に典型的な受動文とは大きく異なる点に注意が必要である。項の再配置から受動の諸機能にいたるまで、ジンポー語の受動文は典型的な受動文とはいえない。次の第 3 節で示すように、日本語で受動形式 -(r)are を用いる例文の多くは、ジンポー語では受動文を用いて表現することができない。この事実も、ジンポー語の受動文と日本語の受動文の差異を示唆している。さらに、頻度の観点から見ても、ジンポー語の受動文の出現頻度は低く、とくに口語においては、日本語や英語で受動文を用いるのが自然な (11) のような例でも、ジンポー語では能動文を用いるのがもっとも自然である。

3. 受動表現資料

本節では, 風間・川村・成田 (2009) の調査票の調査項目に対応するジンポー語の資料を提示する. なお, 本節の例には, 和訳が 2 種類ある. 例文番号直後の日本語文は調査票のものであり, 鉤括弧内の日本語文はジンポー語に即した訳である. 調査票の日本語文が受動文を用いる場合でも, ジンポー語で同様の受動表現が用いられるとは限らない点に留意が必要である. また, 本節の例文番号は, 風間・川村・成田 (2009) の調査票における例文番号に対応している.

次の例は, 典型的な直接受身を意図した調査項目である (風間 2009: 17). ジンポー語においても, (1a) のように, この状況を受動文で表現することができる. ただし, 第 2 節で述べたとおり, この文では動作主を明示することができない. 動作主を明示するには, (1b) のような能動文を用いる必要がある.

(1a) マガムは (マノーに) 叩かれた.

màgam=gò gəyèt khrúm=?ay.

PSN=TOP beat meet=DECL

「マガムは叩かれた」

(1b) mǎno=gò màgam=phé? gəyèt=?ay.

PSN=TOP PSN=ACC beat=DECL

「マノーはマガムを叩いた」

次の例は, 持ち主の受身を意図した調査項目である. この例では, 直接の動作対象が身体の一部となっている. ジンポー語では, (2a) のように, この例を受動文で表現することが可能である. ただし, この種の文では動作主を明示することができない. 動作主を明示するには, (2b) のような能動文を用いる必要がある.

(2a) マガムは (マノーに) 足を踏まれた.

màgam=gò ləgo gəbyè? khrúm=?ay.

PSN=TOP foot step meet=DECL

「マガムは足を踏まれた」

(2b) mǎno=gò màgam=ná ləgo gəbyè?=ya=?ay.

PSN=TOP PSN=GEN foot step=BEN=DECL

「マノーはマガムの足を踏んでやった」

次の例も, 持ち主の受身を意図した調査項目であるが, (2) とは異なり, 直接の動作対象は身体の一部ではなく持ち物である. 一般に日本語では, 動作対象が身体の一部である場合は, それを省略しても文が成立するのに対し, それが持ち物である場合は省略することができない. この点で, 前者は後者よりも直接受身に近い性質を持つとされる. このことから, 持ち主の受身として前者のみが成立する言語もある (ibid., p. 17). ジンポー語では, (3a) の例のように, この文を受動文で表すことができる. ただし, (2a) の例と同様に, この文では動作主を明示することができない. 動作主を明示する場合は, (3b) のような能動文を用いる必要がある.

- (3a) マガムは (マノーに) 財布を盗まれた.

màgam=gò gùmphrò-sùmbù? ləgú khrúm=?ay.

PSN=TOP money-pocket steal meet=DECL

「マガムは財布を盗まれた」

- (3b) mǎno=gò màgam=ná gùmphrò-sùmbù? ləgú=ya=?ay.

PSN=TOP PSN=GEN money-pocket steal=BEN=DECL

「マノーはマガムの財布を盗んだ」

次の例は、自動詞からの間接受身を意図した調査項目である。この種の例は、項の減少ではなく増加を伴う点で、通言語的に典型的な受身から大きく逸脱している (ibid., p. 17)。ジンポー語では、この文を受動文で表すことはできず、以下の例のように、能動文を用いる必要がある。

- (4) 昨日の夜、私は赤ん坊に泣かれた。それで、ちっとも眠れなかった。

mə-ná? mà khráp=?ay. day məjò kəci=pyi í-lú ?yúp=?ay.

yesterday-night child cry=DECL that because few=even NEG-get sleep=DECL

「昨日の夜、赤ん坊が泣いた。それで、(私は) ちっとも眠れなかった」

次の例は、一回的なモノ主語の受身を意図した調査項目である。英語では一般的な受動文として成立するものの、日本語では本来の自然な表現ではなく、伝統的な受身の用法に則さないとされる (ibid., pp. 17-18)。ジンポー語では、この文を受動文として表現することはできず、次の例のように能動文を用いる必要がある。この文の直訳は「マガムは新しい家を建ててあった」である。このように、ジンポー語では結果相を用いて表現される。一回的なモノ主語の受身においては、話者の関心が動作主から対象物 (およびその対象物における行為の実現) へと移行しているため、結果相との密接な関係が指摘されている (ibid., p. 17)。

- (5) 新しいビルが (マガムによって) 建てられた。

màgam=gò ntà nnán gáp=dá=?ay.

PSN=TOP house new build=RES=DECL

「マガムは新しい家を建てた」

次の例は、恒常的なモノ主語の受身を意図した調査項目である。この文は、動作主が不特定であるタイプに属し、とくに受動が非人称または不定人称と関連する言語では、受動文が使用されることが予測される (ibid., p. 18)。ジンポー語では、この文を受動文として表現することはできない。第2節で述べたとおり、この言語では (6a) のように、動作主を明示しないことによって背景化が実現される。あるいは、(6b) のように、主語を「カナダ人」とする属性叙述文の形式で表現することも一般的である。

- (6a) カナダではフランス語が話されている。

Canada=kó? French-gà eəga=mà=?ay.

Canada=LOC French-language speak=PL=DECL

「(人々は) カナダでフランス語を話す」

- (6b) Canada=ni=gò French-gà eəga=màʔ=ʔay.
 Canada=PL=TOP French-language speak=PL=DECL
 「カナダ人はフランス語を話す」

次の例は、形式的には直接受身であるが、モノ主語を持ち、モノの所有者などの被影響者が想定される文である (ibid., p. 18). ジンポー語では、この文を受動文として表現することはできない。以下の例のように、能動文を用いる必要がある。

- (7) 財布が (マガムに) 盗まれた。
 màgam=gò gùmphrò-sùmbùʔ ləgú=ya=ʔay.
 PSN=TOP money-pocket steal=BEN=DECL
 「マガムが (誰かの) 財布を盗んでやった」

次の例は、モノ主語受身で、結果状態を表す文を意図した調査項目である。モノ主語受身が成立しにくいとされる日本語においても、このタイプの受動文は古くからの使用が確認されている (ibid., p. 18). ジンポー語では、この文を受動文として表現することはできない。以下に示す例のように、動作主を明示しない能動文を用いる。この文では、結果状態が結果相によって表現されており、直訳は「壁に絵を掛けてある」である。

- (8) 壁に絵が掛けられている。
 eəkûm=kóʔ sùmla nóy=dá=ʔay.
 wall=LOC picture hung=RES=DECL
 「壁に絵が掛けてある」

次の例は、感情述語の受身を意図した調査項目である。感情述語は、対象物の物理的変化を伴うような他動性の高い動詞とは異なる振る舞いを示すことが多く、そもそも受動文が成立しない言語もありうる (ibid., p. 19). ジンポー語では、この文を受動文として表現することはできない。以下の例のように、能動文を用いるのがもっとも自然である。

- (9) マコはマガムに愛されている。
 màgam=gò màkóʔ=phéʔ tsó-ràʔ=ʔay.
 PSN=TOP PSN=ACC love-like=DECL
 「マガムはマコを愛している」

次の例は、伝達動詞の受身を意図した調査項目である。ジンポー語では、この文を受動文として表現することはできない。以下の例のように、能動文を用いる必要がある。

- (10) マガムはマノーに「…」と言われた。
 màno=gò màgam=phéʔ “...” nù tsun=ʔay.
 PSN=TOP PSN=ACC QUOT say=DECL
 「マノーはマガムに…と言った」

節間で同一主語を維持するために、受動文をはじめとするボイス諸形式を用いる言語が存在する。たとえば、第2節で述べたとおり、英語の重文では、後続文の主語を省略するには先行文の主語と一致させる必要があり、その手段として受動文が用いられることがある (ibid., p. 19)。一方、第2節で見たように、ジンポー語では節間で同一主語を維持する必要はない。たとえ後続文の主語が省略されていても、文脈から復元可能であれば、先行文の主語と同一である必要はない。ジンポー語では、(11a) と (11b) は同一文を用いて表現するのが自然である。

(11a) マガムはマノーに呼ばれて、いまマノーの部屋に行っています。

màno=gò màgam=phé? ɛəgá=ná, yá? màno=ná gòk=kó? ɲà=?ay.

PSN=TOP PSN=ACC call=SEQ now PSN=GEN room=LOC stay=DECL

「マノーはマガムを呼んで、(マガムは) いまマノーの部屋にいる」

(11b) マノーがマガムを呼んで、マガムはいまマノーの部屋に行っています。

màno=gò màgam=phé? ɛəgá=ná, yá? màno=ná gòk=kó? ɲà=?ay.

PSN=TOP PSN=ACC call=SEQ now PSN=GEN room=LOC stay=DECL

「マノーはマガムを呼んで、(マガムは) いまマノーの部屋にいる」

4. まとめ

ジンポー語には、受動的な項の再配置を伴う「受動文」と呼びうる構文が存在する。しかし、この構文は必ずしも項の再配置を伴うわけではなく、さらに動作主の背景化、被動者の前景化、節間での同一主語の維持などの、通言語的に典型的な受動文の諸機能とも必ずしも結び付かない。そのため、ジンポー語の受動文をほかの言語の受動文と同一視することはできない。この点は、第3節で示したように、多くの日本語受動文がジンポー語では受動文を用いて表現することができないという事実からも裏付けられる。このことは、日本語の受動文が扱う機能領域を、ジンポー語では異なる手段によって実現していることを意味する。動作主の背景化は動作主の非明示や不定表現によって、被動者の前景化は左方転移によって実現される。また、節間統語論においては、節間での同一主語の維持が不要であるため、ジンポー語では受動文によって項を再配置する必要がない。文脈から復元可能であれば、省略が含まれていたとしても、節間で主語が異なることは大きな問題とはならないのである。なお、本稿で確認したジンポー語受動文に見られる特徴の多くは、ビルマ語の受動文の特徴とも類似する部分がある(岡野 2009, 倉部 2013)。

略号一覧

1sg	1st person singular
A	agent-like argument of a transitive clause
ACC	accusative
BEN	benefactive
COP	copula
DECL	declarative
GEN	genitive
LOC	locative
NEG	negative

NMLZ	nominalizer
P	patient-like argument of a transitive clause
PL	plural
PSN	person name
QUOT	quotative
RED	reduplicant
RES	resultative
S	single argument of an intransitive clause
SEQ	sequential
TOP	topic

参考文献

- Dixon, R. M. W. 1994. *Ergativity*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Foley, William A. & Robert D. Van Valin, Jr. 1984. *Functional syntax and universal grammar*. Cambridge: Cambridge University Press.
- 風間伸次郎. 2009. 「特集 受動表現：まえがき」 『語学研究所論集』 14. 15–29.
- 風間伸次郎, 川村大 & 成田節. 2009. 「特集 受動表現：付録アンケート」 『語学研究所論集』 10. 29–31.
- Keenan, Edward L. & Matthew S. Dryer. 2007. Passive in the world's languages. In Timothy Shopen (ed.), *Language typology and syntactic structure, Second edition*, vol. 1, 325–361. Cambridge: Cambridge University Press.
- 倉部慶太. 2012. 「ジンポー語の格標示」 『京都大学言語学研究』 31. 133–180.
- 倉部慶太. 2013. 「ビルマ語の受動構文」 『地球研言語記述論集』 5. 27–71.
- Kurabe, Keita. 2016. A grammar of Jinghpaw, from Northern Burma. Ph.D. dissertation, Kyoto University.
- Kurabe, Keita. 2017. Jinghpaw. In Graham Thurgood & Randy J. LaPolla (eds.), *The Sino-Tibetan languages, Second edition*, 993–1010. London and New York: Routledge.
- Kurabe, Keita. 2021. Typological profile of the Kachin languages. In Paul Sidwell & Mathias Jenny (eds.), *The languages and linguistics of mainland Southeast Asia: A comprehensive guide*, 403–432. Berlin, Boston: De Gruyter Mouton.
- Kurabe, Keita. to appear. The Jinghpaw-Luish languages. In Kristine Hildebrandt, Yankee Modi, David A. Peterson, & Hiroyuki Suzuki (eds.), *The Oxford guide to Tibeto-Burman languages*. Oxford: Oxford University Press.
- 岡野賢二. 2009. 「ビルマ語の受動表現に関する覚え書き」 『語学研究所論集』 14. 125–140.
- Shibatani, Masayoshi. 1985. Passives and related constructions. *Language* 61. 821–848.

執筆者連絡先 : kurabe@aa.tufs.ac.jp

原稿受理 : 2024 年 12 月 1 日